

## 紅型子ども着から考える

永津 禎三

「琉球美、造形研究会」ではこれまで三度に亘り「紅型衣裳見学会」を開催し、沖縄県立博物館・美術館に於いて、同館所蔵の紅型衣裳を閲覧する機会を得ている。第一回目は、2024年5月13日に開催し〈桃色地小紋文様紅型木綿衣裳〉を熟覧し、第二回目は2025年6月17日に、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉を熟覧した。

第三回目となる今回の「紅型衣裳見学会」は「琉球美、造形研究会」第25回定例研究会として2025年12月11日に実施し、〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉〈浅地竹鉄線模様子ども着〉を閲覧資料として選んだ。第二回目に閲覧した〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉と合わせ、三点の子ども着を比較することで、大人の衣裳から子ども着に仕立て直す際の手法や工夫、既存の模様を構成し直す際の美意識などについて考察を深められるのではないかという狙いである。

この三点の子ども着は、いずれも『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち』展（2012年）に出品され、図録にも掲載されている。〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉の解説文をまずは紹介したい（英文略）。

### 39 白地震に鶴松梅楓模様子ども着

苧麻、両面染、大模様―大柄、白地型 19世紀 丈53.0×衿29.0cm 沖縄県立博物館・美術館

反物の布一枚中で後身頃が仕立てられている。このような子ども着は一つ身と言われ、乳幼児が着用する。模様は白地型で、鶴と松を霞にのせ、梅と楓を添えている。国宝・琉球国王尚家関係資料にある紅型衣裳に類似する模様である。この作品は、尚家資料とは、布素材が異なり、配色や地色も違うが、苧麻の素材の白さが模様を引き立たせている。鶴の模様が背中では上下に反転しており、おそらく、ここが肩山であったと思われる。大人の衣裳を子ども用に仕立て直されている。この子ども着は、身分の高い家柄の子弟が身につけたものである。（YI）



〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉



解説文にある「国宝・琉球国王尚家関係資料にある紅型衣裳」とは〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉と考えられる。「琉球尚王家秘宝展」(西武美術館,1984年)の図録に掲載されていた図版(前)と「復帰20周年記念特別展 海上の道—沖縄の歴史と文化—」(東京国立博物館,1992年)の図録に掲載されていた図版(後)を参考にした。



〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉

〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉の図版(後)から型紙一つ分の模様を作成し(図A)、その上に〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉から拾った図柄(図B)を乗せた図(図C)を作成した。ここに可能な限り拾える小部分を配し(時には左右上下を反転させて)〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉型紙一つ分の模様を復元してみた。

〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉の上に〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉の模様を重ねる作業をしながら、〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉の模様の美しさと繊細さを実感した。

〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉の元になっていた胴衣がまず作られ、後年になってから、その図柄を参考にして〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉が作られたのではないかと想像が膨らんだ。強い配色の〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉のために糊おきの線を太くする修正を施したのかもしれないが、やはり、〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉の品の良さが際立っているように感じられた。

見学会でマイクロスコープを用いて観察した際にも、使用された苧麻生地も顔料も最高の素材が用いられていることが話題になったが、模様の繊細さと相まって、この品の良さを醸し出しているように思えた。



図 A



図 B



図 C



〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉型紙一つ分の模様



この〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉型紙一つ分の模様を〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉の模様構成に合わせ、〈白地震に鶴松梅楓模様胴衣〉想像図を下図のように作図した。また、衣裳仕立ての〈白地震に鶴松梅楓模様衣裳〉想像図も『沖縄復帰 40 周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち 展 図録』に掲載されているいくつかの衣裳を参考に作図してみた。



〈白地震に鶴松梅楓模様胴衣〉想像図

見学会を終えて美術館・博物館のカフェで昼食休憩していた時、偶然、宮城奈々さんがいらっしゃって、この〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉が、第二期の「琉球王国文化遺産集積・再興事業」の復元対象になっていることを伺った。

本事業での衣裳の復元に大いに期待したい。せっかく型紙から復元されるのだから、〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉だけでなく、仕立て直される前の大人着も復元していただければと期待は高まる。さらに、胴衣と衣裳の二種類が復元されれば、なお素晴らしい。

また、この繊細な型紙を用いて〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉も復元すれば、現存する尚家関係資料の胴衣との違いが一目で分かり、線の太さや微妙な形態の違いなどの模様の相違が、強い色彩を意識してのものだったのか等、その意図も考察することができると思われる。このような探究にまでは是非とも進んで欲しいと願っている。

この〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉の型紙一つ分の模様を推測するにあたっては、この子ども着が、「一つ身」と呼ばれる仕立ての乳幼児が着用する小さなサイズのため全ての柄が揃わず、その作業を当初は諦めていた。

第二期の「琉球王国文化遺産集積・再興事業」の復元対象になっているのなら、その復元が終わり、資料が公開された後に改めて考察しようかとも考えていた。

そんな時、たまたま所有していた展覧会図録に〈黄平絹地雲鶴松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉の図版を見つけた。

稚拙な作業しかできないのは分かっていたが、少しでも早く元の形を確認したくなり、模様の復元を試みた。

その工程も含めて〈白地震に鶴松梅楓模様胴衣〉想像図を作成する過程を短い動画に纏めてみたので、この QR コードからご覧いただきたい。



〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉から  
〈白地震に鶴松梅楓模様胴衣〉を想像する



〈白地震に鶴松梅楓模様衣裳〉想像図



続いて『沖縄復帰 40 周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち 展 図録』の〈浅地竹鉄線模様子ども着〉の解説文を紹介したい（英文略）。

## 108 浅地竹鉄線模様子ども着

苧麻、両面染、大模様－大柄、白地型 19 世紀 丈 77.0 × 衿 41.0cm 沖縄県立博物館・美術館

紅型で染めた子ども着が、幾例かみられる。紅型を身につけられる人は限られており、士族や富裕層の子弟にしか求めることが出来ないものであった。袖口の小さな小袖と、袖口の大きく開いた振袖の二つのタイプが見られる。この衣裳は小袖に仕立てられている。白地型紙で模様を染め藍で地染めされており、竹の笹の葉が風に揺らぐように見える涼しげな作品である。（YI）



〈浅地竹鉄線模様子ども着〉

この〈浅地竹鉄線模様子ども着〉については、これまでに見た〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉とも〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉とも異なる構成の仕方で大人着から子ども着に仕立て直されていたので、今回の閲覧資料として選んでみた。図録の図版写真が下図のようなものであったので、その質については期待していなかったのだが、実

際に目にして、これが間違いだったとすぐに気付いた。

〈白地霞に鶴松梅楓模様子ども着〉のように、最上質の苧麻素材と最高の顔料を使用した繊細な紅型ではないのだが、その大らかな模様がその素材とピッタリ合っていて、とても上質なものであった。

更に、熟覧するにつれ、不思議な箇所を発見するに至り、大いに考察を促されることになった。

この子ども着の型紙一つ分の模様に関しては、後身頃の腰揚げの部分を広げることですぐに把握することが出来た。

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉と同様に反物の2/3ほどの幅で子ども着のための生地を取り出しているのだが、反物の左端からと右端からの二つの取り方をしていることが、図版写真からでも確認できていた。





実際に資料を撮影した写真から型紙ひとつ分の模様を抜き出し、これを示そう。

左ページの子ども着の写真と見比べればよくわかるが、後身頃の右側と左側では、生地を上下にずらして模様の連続性を作り出している（図D）。このズレを揃えると、左右の図柄には半分弱ほど同じ部分があるのが分かる（図E）。この同じ部分を重ねれば、これが元々の反物の型紙ひとつ分の模様である（図F）。



図D



図E



図F

前回、閲覧した〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉では、元の反物の2/3程の幅を使用しているのは同様だが、右端からだけ取っていて、これを片方は上下逆転させ合わせることで、大胆な色面の模様構成にしている。

それに対して、〈浅地竹鉄線模様子ども着〉では、反物の両端から取り出して組み合わせることで、竹の斜めに伸びる線が繋がり、鉄線の白い葉をまとめて斜め方向への模様の動きを出している。

このように、それぞれの元の模様の特徴を活かす優れた造形感覚がある。

また、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉では、連続する模様の反物のため右身頃では後ろが順で前が逆の模様になり、左身頃では前が順で後ろが逆の模様になっている。

しかし、〈浅地竹鉄線模様子ども着〉では、前と後ろの写真を見比べれば分かるように、竹の葉の垂れ下がる向きが揃って同じである。これは、肩山で型紙の方向を逆に変えることで、前からでも後ろからでも同じ向きに模様が見えるようにしているためである。

この肩山での切り返しは、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉との比較で前回ともに閲覧した〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉でも行われていた。

これまでの私の考察『〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉から考える』やその続編『紅型衣裳三点を閲覧しての再考察』では、肩山での切り返しでない、連続する模様の反物による仕立ての衣裳を想像していた。

そのような構造が頭に入っていたはずなのに、最初に〈浅地竹鉄線模様子ども着〉の元の衣裳を想像する際には、後身頃から把握できた型紙一つ分の模様を並べることだけを進めてしまい、前身頃の状態を意識していなかった。



〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉



そのため、最初に作成した想像図はこの2点である。斜めに伸びる竹の線を活かした構造を考えた。



〈浅地竹鉄線模様衣裳〉想像図 初期二案



その後、前身頃の模様の向きに気が付き、最初に作成した想像図が、閲覧した〈浅地竹鉄線模様子ども着〉の元の衣裳の模様としてはあり得ないことが分かった。その頃、鎌倉芳太郎資料にこの紅型型紙が存在することを知り、『沖縄復帰 40 周年記念 紅型 琉球王朝のいとくたち 展 図録』を見直した結果、〈水色地竹鉄線模様衣裳〉（19 世紀 松坂屋コレクション／図録図版 221）を見つけた。鎌倉芳太郎資料の〈竹鉄線模様白地型紙〉も掲載されていた。

この構造で「想像図 最終案」に作り直した。



〈水色地竹鉄線模様衣裳〉



〈浅地竹鉄線模様衣裳〉想像図 最終案



私としては、この松坂屋コレクションの衣裳の模様構造は、ただ横並びになっているだけで少々退屈な気もするが、これはこれで琉球王朝の衣裳らしさがあるし、確かにこのような実例も多い。肩山で切り返すタイプは左右対称も含めて安定した構造である。

ここで改めて気になってきたのが、〈浅地竹鉄線模様子ども着〉を閲覧した時の疑問である。それは、右後身頃の下部にある不思議な染めの切り返しの箇所である。



左の写真だけでは、この部分がどうなっているのか分かりにくいですが、ここでは3回型紙の向きを変えて糊置きし染めている。見学会で閲覧していた時には、単に糊置きの際のミスを修正したものではないかと単純に考えていたが、そうではなかった。型紙一つ分の模様を想定して、その想定した模様が鎌倉芳太郎資料の現存する型紙で裏付けされたこの時点で見直すと、まさに「謎」としか言いようがないのである。

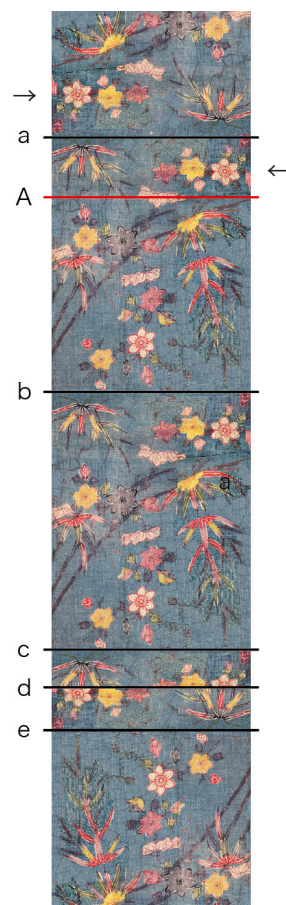
この「謎」を解くために、右のような図Gを作図した。左の写真の〈浅地竹鉄線模様子ども着〉では、反物が既に2/3の幅に詰められているので、右のように、仕立て直される前の衣裳と想定する〈浅地竹鉄線模様衣裳〉の反物の形で考えた方が分かりやすいからである。

図Gでaから下が〈浅地竹鉄線模様衣裳〉の右後身頃になる。aより上方に後身頃と同じ長さの右前身頃がある（p.11の全体図を参照）。

〈浅地竹鉄線模様子ども着〉の右後身頃で使われたのは、A～eまでになる。つまり、〈浅地竹鉄線模様衣裳〉では肩山がaの位置だが、〈浅地竹鉄線模様子ども着〉ではAの位置が肩山である。これは〈浅地竹鉄線模様子ども着〉の2/3に詰めた反物を竹の斜めの動きに合わせてずらしたために生じたズレ（図D）でもあるが、左右の前見頃の肩口に桃色の花が揃い、とても愛らしい効果も生んでいる（→）（p.11の全体図でより確認しやすい）。

さて、検討してみよう。図Gでa、b、c、d、eが全て型紙を継いだ位置である。aの位置は〈浅地竹鉄線模様衣裳〉の肩山になる位置なので、型紙は方向を変えて継がれている。bの位置では同じ向きに順当に継がれている。そして、cの位置なのだが、同じ向きで順当に継いだかと思うと、たった10cmほどで糊置きを止め、dではまたその10cmほどを今度は型紙の向きを変えて糊置きしているのである。ここまでしか閲覧資料からは確認できないので、この先は推論になるのだが、この流れで行けば、eでは変更した向きのまま継いで行ったと考えるのが自然なので、そのように作図した。

「単に糊置きの際のミスを修正したものではない」と断じたのはこのような複雑な手間がかけられているからである。何故このようなことをしているのだろうか。



図G

〈浅地竹鉄線模様子ども着〉では右後身頃にこのような破調とも言える10cmほどの模様があることの効果と言うべきかは定かではないが、一種のアクセント的な効果を認めることも出来なくはない。しかし、〈浅地竹鉄線模様衣裳〉でdとeの継ぎがあるものを用いて作図してみても、効果とは全く認められず、美しくないのだ。

この「謎」に対する私の解釈は次のようなものである。

c、d、eの、型紙の向きを変えた複雑でごく短かな糊置きは、dを肩山とする異なったバージョンの反物を作るための操作ではなかったかと考えるのである。そのバージョンとは、模様を上下を逆にするものだ。そして、その異なったバージョンの糊置きを、誤って、一身頃前から始めてしまったミスが引き起こした結果ではないかと、そう推論した。

この推論に至った理由を〈浅地竹鉄線模様衣裳〉想像図 Version 2 で示してみたいと思う。





【Ⅰ】



【Ⅱ】

〈浅地竹鉄線模様衣裳〉想像図 Version 2

異なったバージョンを必要とした理由については、衣裳の丈を 10cm ほど伸ばしたいという状況を想像してみた。松坂屋コレクションの衣裳と同じ模様構造にした「想像図 最終案」の丈を伸ばすと、やや、裾の方が間伸びした印象になるように思える（下図）。

Version 2 の【Ⅰ】が、図 G の d が肩山になる場合の想像図である。肩山に黄色と桃色の花が並び、「想像図 最終案」と同じような華やかさが生まれている。竹の葉の向きを逆にしているので、図像の意味としては、違和感があるかもしれないが、肩山で型紙の向きを変えない連続した模様を衣裳に仕立てた時には、普通に起こることでもあるので、わざわざ逆向きにするのかという疑問を置けば着物の柄としては問題ないだろう。

Version 2 の【Ⅱ】は、「c、d、e の、型紙の向きを変えた複雑でごく短かな糊置き」を行わず、普通に模様の向きを逆にしただけのものである。【Ⅰ】と比較して、肩山に黄色と桃色の花が並んでいない分、華やかさはないが、すっきりとした柄の流れの爽やかさはある。

どちらが良いとは言えないが、【Ⅰ】のような華やかさを加味したくて、このような複雑な糊置きを施したのではないかというのが、私の推論である。



〈浅地竹鉄線模様衣裳〉想像図 最終案の丈を伸ばした状態

右後身頃の下部にある不思議な染めの切り返しの箇所への疑問から始まった推論は妄想に近いものなのかもしれないが、実に多くの気づきを私にもたらしてくれた。

はじめは、仕立て直す際に、衣裳の時の肩山の位置を大胆に後身頃の真ん中に移動させた〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉の方に目を奪われていたのだが、〈浅地竹鉄線模様子ども着〉での、肩山位置の細やかなズラしの効果に感心し、解ききれぬ「謎」を追ううちに、子ども着への仕立て直しの豊かな可能性を再認識させられた。

子ども着に興味をもった最初のきっかけは、前回、閲覧した〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉で、その大胆な色面の再構成の魅力だったのだが、今回、この〈浅地竹鉄線模様子ども着〉を閲覧したことで、模様の流れや階調による空間感という、自分の作品制作により深く関わる、造形のヒントを得たように感じる。



そのような視点を得てから、改めて、『沖縄復帰 40 周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち 展 図録』を見直した時、もう一つの子ども着が魅力あるものに見えてきた。それが、〈白地鶴に貝藻波模様子ども着〉である。これまでと同様、解説文を載せよう。

#### 40 白地鶴に貝藻波模様子ども着

苧麻、両面染、中手模様一大柄、白地型 19 世紀 丈 82.0 × 衿 44.5cm サントリー美術館

横に流れる線で波を表し、その波に揺れ動く貝藻と貝、さらに上空には鶴が飛び交っている。苧麻の白地の清清しさを背景に、海から上空へと空間の広がりを感じさせる。また、横に流れる縞が身頃と袖が繋がるように仕立てられており、上空だけではなく、水平の空間の広がりも感じさせる。作品 31 とほぼ同様の構成ながら朱や臙脂を中心とした色合いで柔らかな印象である。(NR)



〈白地鶴に貝藻波模様子ども着〉



〈白地鶴貝流水鳥模様衣裳〉

解説文の作品 31 は〈白地鶴貝流水鳥模様衣裳〉(沖縄県立博物館・美術館)である。「ほぼ同様の構成」ということで、見比べてみると、鶴や小鳥、貝、藻の位置や向き、形態が微妙に異なっているが、確かに全体の構成は似通っている。

〈白地鶴に貝藻波模様子ども着〉の型紙一つ分の模様を推定すると、こちらの方が、〈白地鶴貝流水鳥模様衣裳〉よりもかなり洗練された模様である。



〈白地鶴に貝藻波模様子ども着〉の型紙一つ分の模様の推定



〈白地鶴貝流水鳥模様衣裳〉の型紙一つ分の模様の推定



そして、〈白地鶴貝流水鳥模様衣裳〉が、肩山で模様を切り返し、前と後ろが同じ模様となる衣裳であり、これと同様の反物から〈白地鶴に貝藻波模様子ども着〉は仕立て直されているであろうことが分かる。それは、後身頃の真ん中で、模様の向きが上下反転しているからだ。〈白地鶴に貝藻波模様子ども着〉には腰揚げがあつて隠されて見えないが、ここに仕立て直される前の衣裳の時に肩山だったところがあるのだろう。

〈白地鶴に貝藻波模様子ども着〉の模様は先に述べたように、非常に洗練されたものであり、しかも、子ども着に仕立て直された時の造形力が素晴らしい。肩山のところを後身頃の真ん中に配したこと、しかも、それが反物の裏側を使ったであろう左右反転した模様を使っていること（見頃の部分は袖の部分の模様とは左右反転している。どちらが衣装の時の向きかは、図録図版からは判断できないが、〈白地鶴貝流水鳥模様衣裳〉の模様を基準に述べた。）など、子ども着の模様構成の空間感の素晴らしさは驚くほどである。

子ども着に仕立て直される前の衣裳をいくつか見てきたが、これまで述べてきたように、肩山で柄を切り返したものが多かった。この前と後ろの模様構成が同一のものは、型紙の単位が横に並ぶ落ち着いた構造で、あらかじめ計画通り染められ仕立てられた固定的な印象が強い。（本音を言えば、私にはそれが退屈だ。）

しかし、それを仕立て直す際に、自由な造形力を発揮して、既存の反物を逆向きに使ったり、裏返しで使ったりして組み合わせ、素晴らしい子ども着として全く新しい空間感の再構成を果たしている。ここに私は、琉球ならではのおおらかで力強い造形の魅力を感じるのだ。

〈白地鶴に貝藻波模様子ども着〉はサントリー美術館蔵なので、これまでのように沖縄県立博物館・美術館で閲覧させていただく機会には巡り合えないだろうが、是非とも、実見してその色、形、風合い、質感を確認してみたい。そして、腰揚げで隠れた部分を確認し、実際に写真を撮影し、図録図版からだけでは全貌を確認できない細部まで観察し、型紙ひとつ分の模様を割り出して分析し、造形の秘密に迫ってみたいものである。

ここで一つの夢を語ってみたい。例えば「子ども着に仕立て直される紅型展」のような企画を沖縄県立博物館・美術館にさせていただき、全国の博物館や美術館などに所蔵されている「紅型子ども着」と「子ども着に仕立て直される以前の紅型衣裳」あるいは「これに類似する紅型衣裳」を網羅した展覧会を開催してもらえないかという夢である。

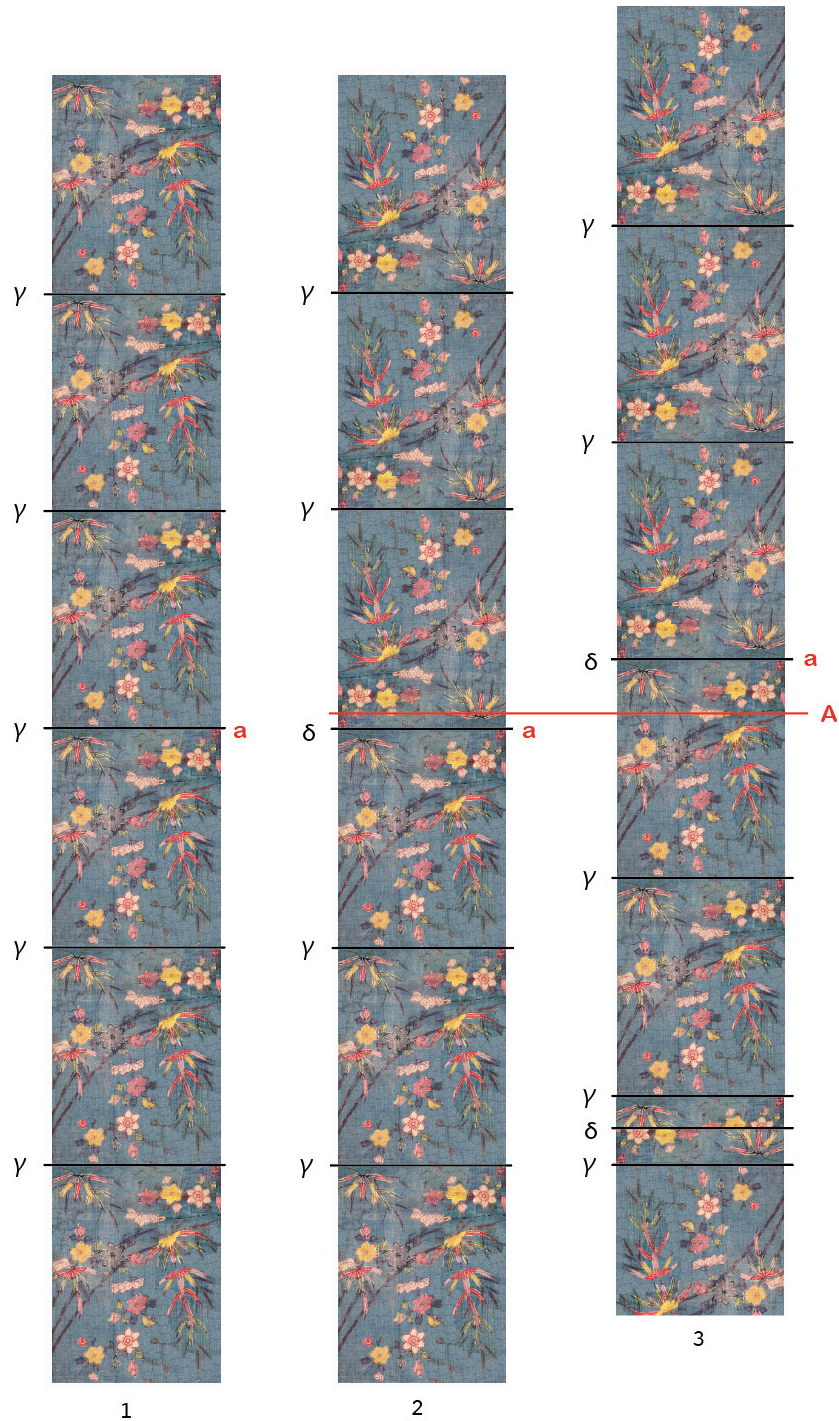
そして、開催の際には、閲覧・資料調査を許可していただけないかと、更なる夢を見続けるのである。

〈浅地竹鉄線模様子ども着〉から元の衣裳の型紙ひとつ分の模様を推測し、衣裳の模様構成を想像して作図した過程の動画も作っています。  
こちらの QR コードからご覧ください。



〈浅地竹鉄線模様子ども着〉から  
〈浅地竹鉄線模様模様衣裳〉を想像する





「型紙の継ぎ方と肩山の位置の説明図」

〈浅地竹鉄線模様子ども着〉では反物が既に 2/3 ほどの幅に詰められているので、仕立て直される以前の〈浅地竹鉄線模様衣装〉の時の反物の形を想定した。型紙の継ぎ方は、 $\gamma$  が順、 $\delta$  が逆。

1 は、最初に作成した想像図の 2 点の反物。型紙は順々に継がれている。a の部分が肩山になり、a より上が前見頃、下が後見頃となる。前見頃は模様が上下逆になる。

2 と 3 が閲覧資料の〈浅地竹鉄線模様子ども着〉の反物と想定するもの。2 が左見頃、3 が右見頃。a が「衣装」の時の肩山。A が「こども着」の時の肩山で、このラインで揃うように図示したので、前見頃の左右の両肩口に桃色の花が並ぶのが良く分かる。前見頃も後身頃も模様は逆にならない。

3 は後見頃の下方に複雑な型紙の継ぎが繰り返されている（7 ページに詳細）。



紅型子ども着から考える

著者：永津禎三

私家版

2026 年 1 月 7 日発行